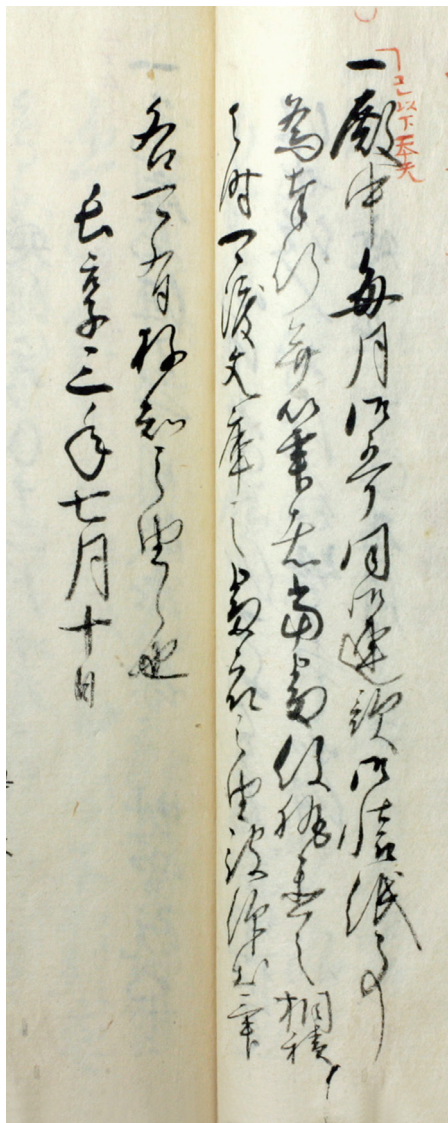


室町文化（連歌）



* 近藤清石文庫98（20の15）「大内氏実録土代15」

解説

連歌は、複数の人間が和歌の上句と下句を交互に詠み連ね、新しい作品を作り上げていく、知的なゲームです。ある時期から「源氏物語」に由来する詞が利用されるようになり、それを知ることが必須の教養とされました。連歌の会は、宗匠（そうしょう。会を取り仕切る指導者）のもと、一定のルールに従って、酒食を共にしながら行われました。もちろん景品も用意されており、参加者は、創造と想像の世界を共有しながら濃密な時を一緒に過ごすことにより、人間関係を深めました。

周防・長門を中心に数か国を治めていた大内氏の関係者及びその勢力範囲にあった土地においても、連歌は盛んに行われました。宗祇など一流の連歌師から直接指導を受けたこともあって、大内家の連歌は戦国期の連歌の中心的存在であったと高く評価されています。「大内連歌師」「大内殿内連歌師」などと呼ばれた連歌の名手の中には、大内氏の家臣が多数含まれていました。

写真左は、「大内家壁書」「大内氏掟書」等とよばれる大内氏の法令で、この中に大内氏の館で毎月行われる連歌の懐紙（連歌を書きつける横長の紙）を保管するように定めた規定があります。



* 軸物類92 「宗祇法師画像」
宗祇（1421～1502）は室町時代の代表的な連歌師で、各地を旅して公家や武家などに古典や和歌、連歌の知識を伝えました。